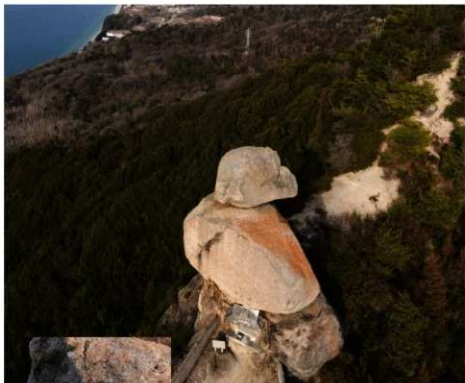


小豆島石丁場調査概報

小豆島石丁場調査委員会

編集 小豆島石丁場調査団
発行日 二〇二二年三月三十一日

No.1



重岩と頂部に残る刻印



四国新聞 2021.8.10 掲載

二〇一九年に「石の島」として日本遺産の認定を受け、多くの人が小豆島の石文化に関心を高めている。近年未調査であった箇所に矢穴を持った巨石の存在が報告され、文献にも記載を見ない石丁場が発見されている。そのために石丁場の再調査の必要性が生じてきた。

二〇二一年八月のある日の午後、炎天下に土庄町重岩の麓にある一団が集まった。これは石丁場調査を行うメンバーである。この日の午前中、石丁場調査委員会の初会合が開かれた。同委員会は小豆島・豊島地域の石丁場跡などを新たに調査することを目的に発足した。

委員会は、土庄・小豆島町関係者と県内外の遺跡調査の専門家二二名で構成し、その下に調査団を組織して八人の調査員を委嘱した。委員長として県文化財保護協会小豆支部長岡上峰康氏を、調査団長に前徳島文理大学教授橋詰茂氏を選出した。委員会は両町の委託を受け、五年ほどの予定で調査を実施する計画である。



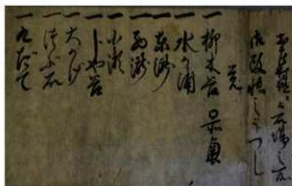
重岩と近くに見る刻印



島の各地に残されている石丁場跡は、豊臣秀吉の大坂城築城時に拓かれたとの伝承があるが、江戸時代徳川氏による築城時のものと確定されている。元和六年（一六二〇）から開始された築城に、諸大名は石垣普請用の石を確保するため各地に石丁場を求めた。その一つが小豆島で、諸大名は島内各地に石丁場を拓いた。熊本藩加藤氏が小瀬・千軒に、小倉藩細川氏と竹田藩中川氏が小海に、大部に松江藩堀尾氏、福田に津藩藤堂氏、岩谷に福岡藩黒田氏、石場に柳川藩田中氏が拓いた。

調査委員会では、今回新たに発見された箇所や、旧石丁場跡の詳細調査を実施することにした。八月七日午後、第一回目の調査として重岩周辺で予備調査を実施した。小瀬原石丁場は、駐車場付近から石が切り出されていたと考えられていた。だが、二〇一八年の徳島文理大学の調査で、重岩へ登る途中にある黒岩不動の裏手にも高い場所にあった

ことが明らかになった。近年ドローンでの空撮により、重岩の頂部に刻印が、またその周辺にも異なった刻印があることが確認された。刻印は今まで知られていないものである。



石丁場名が記された古文書

江戸時代の土庄村大庄屋家所蔵の古文書に、九カ所の石丁場が記載されている。今までの調査でそのうち五カ所は所在場所が判明したが、残り四カ所の所在を明らかにすることが、本調査の目的の一つである。そのために重岩周辺の海岸と谷筋を調べることとした。

二日目は、小豆島町池田上地地区の二〇一〇年に山火事が発生した場所を踏査した。文献には当該地区に石丁場の記載は無い。この場所もドローンの空撮で偶然に発見したものである。矢穴跡が残されている種石や階段状に石を切り取った矢穴跡などが残るが、全体的に比較的新しい時期の石丁場である。いつ誰によって開かれたかは不明だが、近代石材変遷を知る上では

貴重な現場と確認することができた。

暑い盛りりの山登りで汗一杯の状態で、次の現地へと赴く。岩ヶ谷石丁場を見学した後に、新たに発見された福田の小島を訪ねる。直接現場へ行けないため、ドローンによる空撮調査を実施し、石丁場跡を確認し、今後の調査方法を検討する。島北部を廻り大部に立ち寄り、その後小海石丁場の現状を確認、ドローン空撮調査を実施した。参加者は一〇名。



現地踏査 池田山間部



水中ドローンによる海中調査

た。参加者は、調査員六名と県内外の協力者と徳島文理大学学生補助員合わせて一三名である。一日目は小瀬地区の海岸線

の海中分布調査を実施。水中ドローン・空中ドローン・潜水により小瀬地区磯丁場の分布範囲を確認した。とくに水中ドローンをういて海中に沈んだ残石を探索、縦一・五



海底に眠る矢穴跡が残る石

計、横一、高さ一・五計の石の底部に残る矢穴跡を発見した。来年度の調査地点の予定である。また重岩の南の谷筋では、矢穴が残る石と近代の可能性がある石引道を確認した。

二日目は、豊島甲生地区の海中分布調査の実施。水中ドローン・空中ドローンにより、甲生地区の磯丁場の分布範囲を確認する。海岸踏査により、近世の矢穴や近代の石製品を確認する。家浦甲崎地区では空中ドローンにより近世と考えられる矢穴を確認した。文献に記載された甲生浦・家浦の石丁場所在地がほぼ確定できたと見える。

第三回調査は、一二月七日に調査員・協力者五名で実施。重岩南の谷筋山間部の踏査を行う。空中ドローンによる全体地形状況などを空撮。前回確認した矢穴石の拓本採取するとともに、

山中を踏査すると巨石を発見、矢穴跡が縦横何列にもわたって見られる。巨石の側にも矢穴跡が残された石が存在している。詳細は後日再調査することとした。また山中奥地に刻印石を発見した。重岩に刻まれた刻印と同一のもの。当日NHKの取材があり、調査の状況が「ゆう6かがわ」で放映された。

第四回調査は、二月二三・二四日に実施。島民に調査体験参加を呼びかけ、九名の参加希望者がいた。だがコロナの影響で中止となったが、地元ボランティアの人たちの協力を得て、総勢一六名の調査だ。前回発見

した巨石は、高さ四・四計、長さ五計があるが、



新たに発見された矢穴が残る巨石



矢穴ある石の清掃中



ノミ跡と矢穴(上)の拓本採取



草木や落葉で全体が覆われ測量や拓本採取が出来ないため、まず清掃から始めた。石の周辺の草木を伐採し、矢穴に溜まった土を掻き出す作業を全員で取り組む。矢穴は横一二、縦七、深さ一五、大坂城築城時の可能性が高い。文献に記された「じゃ谷丁場」と確認できる。その後二班に分かれ、一班は清掃の継続、もう一班は各場所に所在している石の位置測量をしてデーターを記録、石丁場の全貌を明らかにする。

清掃を終えると次に矢穴の拓本採取だ。実地研修をしてきた学生たちが採拓していく。矢穴の上部にノミ跡が残されている。珍しい状況で、乾拓では採取困難のため湿拓採取が行われた。巨石の周囲を観察すると、下に土砂で半分覆われている石があ



土砂に埋もれていた種石



福田地区調査予定の小島

現場は午前中で切り上げ、夏に調査予定の場所の確認視察のため、福田地区へと足を延ばす。福田の石丁場は、文献に四カ所記載されているが、詳細な調査はされていない。小島で新たな石丁場が発見されたが、そこを中心にして調査の予定である。

石丁場調査
使用用語

刻印：石に刻まれる

た印で、誰の石丁場であるかを知る手立てとなる。大坂城石垣



る。何気なく土砂を取り除くと矢穴が見え始め、やがて全貌が明らかになった。

矢穴が一系列に並んでおり、貴重な発見を見逃すところだった。

二日目は、巨石の測量と3D用の撮影である。石を平面で捉えるのではなく、立体的に見ることが出来るように最新の技術による調査方法を取り入れている。

刻印と同じ刻印が小豆島にあることから、島

から大坂へ運ばれた証明になる。

矢穴：石を切り取るときに掘られた穴、割れた面には菌型のような矢穴の列の跡が残る。ノミを使って石に矢穴を列状に掘る。次いで楔状の矢を矢穴に差し込み、ゲンノウでたたくと矢が石に食い込み一気に割れる。

種石：石材を切り出す元になる自然石。この石

に矢穴を開けて切り取る。

拓本：石や器物に刻まれた文字や文様を紙に写しとったもの。器物などの上に紙を乗せ上から墨でこする乾拓法と、とりたい物の上に紙を置き、湿した綿などで紙を貼り付くように押しつけ、タンポで墨を紙につけていく湿拓法がある。



日本遺産パンフレット

調査への想いを語る(調査員の一言)

・小豆島はまさしく石の島。調査する度に新たな発見があります。石切丁場の新たな価値の解明の一助となれば幸いです。(大嶋)

・陸海空から小豆島の石の歴史を振り返り、当時の空気感をより多くの方々に届けることで、

未来へのチカラとなることと信じて進めて参ります。(坪佐)

・石丁場調査は既に半世紀以上が経過していますが、まだまだ新発見があります。その知的好奇心をぜひ皆さんと共有できればと思います。(高田)

・今年から小豆島石丁場の調査に参加して、その規模の大きさに圧倒されています。楽しんで調査をしています。(梶原)

調査委員会委員及び調査員

委員長 岡上峰康

副委員長 佐々木育夫・武部広文

事務局長 橋詰 茂

委員・調査員 森下英治・下地芳文・板東民哉

上野 進・大嶋和則・高田祐一・梶原慎司

松田朝由・小原一朗・坪佐利治

(編集後記)

島で生まれ育った者として、この調査は何ものにも代えがたい大切なものだ。先人が伝えてきた石の歴史文化を後世に伝えていく、それが我々の使命ではなかるうか。調査は多くの人たちの支えがあつてはじめて出来ることに感謝しつつ……。(S記)